

<講義順序>

オリエンテーション、「科学技術の神学」系とは何か	10/1
1. モデルケースとしての進化論論争：対立図式とは何か	10/8
2. 自然主義の二つのタイプ	10/15
3. キリスト教思想と心理学1	10/22
4. キリスト教思想と心理学2	10/29
5. キリスト教思想と心理学3	11/5
6. 20世紀脳科学と宗教論1	11/12
7. 20世紀脳科学と宗教論2	11/19
8. 脳科学の進展：社会脳研究	11/26
9. 社会脳研究のキリスト教思想にとっての意義	12/3
10. 創発理論と次元論	12/10
11. キリスト教的人間学と脳・心1	12/17
12. キリスト教的人間学と脳・心2	12/24
13. 脳・心・人間・倫理1	1/7
14. 脳・心・人間・倫理2	1/21
15. フィードバック.	

<授業の概要・目的>

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新たな展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たな展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2019年度後期は、これまで数年の講義から浮かび上がった諸問題から、「脳科学とキリスト教」の問題を集中的に取り上げることによって、キリスト教的な視点から宗教哲学を構築する議論を進めたい。

<成績評価>レポートによる。

<受講の注意事項>

・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。

・質問は、オフィスアワー（火3・水3）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

<序：「科学技術の神学」系とは何か>

「この二〇世紀に科学／技術は驚異的な発展をとげ、私たちの生活を大きく変えた。それは一方で、文明の利器として、より多く、より速く、より安く、より楽に、をきわめて短

期間に実現してきた。しかし他方で、核、宇宙、バイオテクノロジー、情報通信などの先端技術のシステムは、ひとり歩きの危険性をもち、人間のコントロールを逸脱しようとしている。さらに、それらの恩恵を享受できる国々（人々）とできない国々（人々）との格差は拡大し、また科学／技術が国境を越えるなかで、地球環境問題にも大きな影響を与えようとしている。」（編集委員による「まえがき」。『岩波講座 科学／技術と人間 1 問われる科学／技術』岩波書店、1999年、より）

（1）科学技術時代とは

1. 科学技術の楽観論以降。20世紀末、1990年代頃から——1980年代以降における環境危機の世界的な共有化、1979年のスリーマイル島原発事故、1986年のチェルノブイリ原発事故などを受けて——科学技術のあり方に対する批判的な反省が目立つようになってきた。

科学技術の発展に対する素朴な期待感とそれに伴うバラ色の未来像：AI、脳科学、遺伝子工学をめぐる言説は別にして、基本的に過去のものとなった。

2. 政治経済の主導の下で進展してきた科学と技術の一体化（科学技術）＝国家的巨大プロジェクト。こうした科学技術の動向は、近代を通じて徐々に進められたものであるが、20世紀半ばにはそれに気づいてきた思想家が存在していた。

3. ハンナ・アーレント：『人間の条件』1958年。

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。・・・重要性から言えば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬこの事件は、それをめぐる不愉快な軍事的・政治的背景さえなかったら、虚嘘いつわりのない喜びで歓迎されたことであろう。・・・むしろ、時の勢いにまかせて現れた反応は、『地球に縛りつけられている人間がようやく地球を脱出する第一歩』という信念であった。」（ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫）

4. 人類が地球に誕生以来、現在に至るまで「地球は人間の条件の本体そのもの」であり、現代科学は生命、人間存在そのものを、「自然の子供としてその仲間に結びつけている最後の絆を断ち切るために大いに努力しているのである」。

→ 宇宙開発や原子力などによる「人間の条件」の根本的な変容

5. 20世紀末の転換期における科学技術をめぐる問い、そして現代の問い。アーレントの議論の延長線上。環境危機、情報化、生命科学などに関わる科学技術の倫理性の問いであり、神学的問い。→ 人間存在の条件。これは、「第一級の政治的問題であり、したがって職業的科学家や職業的政治屋の解決に委ねることはできない」（同書）。

6. ベルナル・スティグレルの「技術の哲学」。

・古代ギリシャのエピメテウス神話に基づいて人間（＝「死すべきものたち」）を本質的特質が「欠如」した存在者と捉えた上で——ゲーレンの言う欠陥生物——、技術とは人間がその欠如にもかかわらず生存するために必要な人工物（人工器官）である。

・技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間は技術によって人間として構成された技術的存在と考えられねばならない。

・記憶を世代から世代へと伝えるための技術であり、図形や文字は、先行する世代の記憶を外在化し、それを次の世代が内在化することを可能にする技術にほかならない。現代の科学技術は、視覚と聴覚のアナログ的総合の技術（写真と蓄音機）を経て、デジタル化へ

と到達。

・記憶技術が産業の管理下に置かれるというプロセスのいわば完成であり、現代は、「記憶の産業化プロセスの時代」。この記憶と意識が産業化と商品化のプロセスに全面的に組み込まれる時代を、「精神の歴史上の一大危機」と捉えている。

7. 科学技術はすぐれて現代的な問題。現代を論じることは科学技術を抜きには不可能。

・「解放の神学」系における現代神学の動向は、人間の救いが具体的な社会的文脈における解放と不可分である。

・モルトマンの場合。『科学と知恵——自然科学と神学の対話』（新教出版社、2007年）、『希望の倫理』（新教出版社、2016年）。科学技術は現代の不安はもちろん希望にも深く関与している。二つの問題系は、相互に結び付き、絡み合っている。

8. ステイグルール。現代の科学技術は視覚と聴覚の総合技術（写真と蓄音機）のデジタル化。

・現代技術は、視聴者である人間の意識と文化産業が提供する視聴覚メディアとをシンクロさせ、その結果、本来は通約不可能でユニークなはずの「私」や「われわれ」（たとえば民族）の固有性は消滅し、すべてが同一の「みんな」（＝「完全に付和雷同する群れ社会」）に解消される。「私」も「われわれ」も同一の視聴覚メディアを消費する「消費者」として同化される。

・このシンクロが可能になったのは、人間の意識の流れと視聴メディアとがいずれも「イメージの流れ」であるという点で同質だからであり、この同質性は、デジタル化された視聴覚総合技術によって極限まで高められる。今や、本物とコピーとは見分けがつかないまでになっており、「人間のほとんどあらゆる経験が、感性・情動的かつ認知・情動的なコントロールに服従することになった」。こうして、「科学技術の神学」系のテーマである視聴覚の総合技術のデジタル化は、「私」と「われわれ」の産業的なコントロール（「みんな」化）という「解放の神学」系のテーマと接続する。

・ハイパーインダストリアル時代：この産業的なコントロール社会。現代の資本主義社会が、従来の資本主義（産業資本主義＋金融資本主義）から区別され文化資本主義あるいは認知資本主義と呼ばれる段階にいたったこと。

・情報的文化的な内容を商品として生産する非物質的労働（＝認知労働）によって特徴づけられ、デジタル化された情報技術を介して人間の生全体（労働も消費もすべて）に資本の支配がおよぶ。

（2）聖書の科学技術理解、その両義性

9. 「科学技術の神学」系を論じるには、科学・技術をキリスト教的神学的にいかにつまえるかが問題。「キリスト教的」な科学・技術理解を確認するために、聖書の創世物語から、科学・技術についての基本的見解を取り出す。問題になるのは、次の聖書箇所である。

・「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」（創世記1章27節）

・「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記2章7節）

・「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆してい

た。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」(創世記 3 章 6 節)

↓

10. これらの三箇所(＋それぞれの前後の文脈)から人間理解に関わるキーワードとして、①神の像／支配(創世記 1 章)、②土の塵／耕す／命名(創世記 2 章)、③墮罪(創世記 3 章)を取り出すことができる。

・①と②という二つのキーワード：人間存在の有限性とまとめることが可能——時間的な始まりは終わりを含意する——。その内、①は伝統的に「創造の善性」と解されてきたことからわかるように、人間存在の善性を意味するものと解釈し、②はその善性において成り立つ人間の行為と理解できる。

11. 土を「耕す」(創世記 2 章 15 節)には「技術」へと現実化し、「命名」(創世記 2 章 19 節)には「科学」に発展する可能性が見出される。世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させるこれらの行為は、まさに科学・技術の原型というべき営みであり、ここから、聖書の人間理解に従えば、科学・技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属するものであることがわかる。

人間は本来的には、耕す存在者、つまり「農民」であり、同時に命名する存在者、つまり、「科学者」なのである。そして、これらの人間の営みは、神の創造物が、神の目から見ると、すべて善なるものであるということ——「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記 1 章 31 節)——からの帰結。

12. ①と②に対して、③は善なる本質の歪曲＝疎外を意味する→キリスト教思想における、人間存在を本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統(聖書の人間理解の哲学的解釈)。この人間理解は、キリスト教的思想の伝統をなしており、現代神学においても受け継がれている。

13. ティリッヒ：この有限性と疎外(本質と実存)の二重性を、人間的生(＝人間の現実存在)の両義性と解している。人間の行為を善と悪のいずれか一方にのみ還元することは不可能であり、本質と実存の混合体としての人間の生の現実においては、善なる面と悪なる面とは不可分に結びついている。人間存在の両義性からは、完全な善人も完全な悪人も存在しない。

<参考文献>

1. 1990年代の問題意識は、次のシリーズと著作に現れている。これらがすべて同年の刊行であることは偶然の一致だろうか。

- ・『岩波講座 科学／技術と人間』(全十一巻＋別巻)岩波書店、1999年。
- ・加藤尚武・松山壽一編『科学技術のゆくえ』ミネルヴァ書房、1999年。
- ・富坂キリスト教センター編『科学技術とキリスト教』新教出版社、1999年。

2. ベルナル・スティグレールの議論。『象徴の貧困——1 | ハイパーインダストリアル時代』、『愛するということ——「自分」を、そして「われわれ」を』、『偶有からの哲学——技術と記憶と意識の話』(いずれも新評論から出版)。

なお、スティグレールの議論の全体を把握するには『偶有からの哲学』が便利。

3. 芦名定道「科学技術の神学にむけて——現代キリスト教思想の文脈より」

(日本宗教学会『宗教研究』第87巻、377-2、2013年、31-53頁)。